

話の広場

エジプト旅行記 ～ 赴任半年の葛藤～

吉田 愛 (JOCV 15-2)
保育士：婦人連盟・ダマスカス

「シュクラン・ガジーラン」(ガジーラン？ ジャジーランでしょ？！)

6月6日、初のアフリカ大陸上陸。私に「エジプトに来た」という実感をもたらしてくれたものは、少し色の黒い人々でも、旅行者だからお金をふんだくってやろう、という魂胆みえみえのエジプト人でもなく、カイロの街並みでもなく、アラビア語の発音がシリアと違うことだった。任地であるダマスカスでは、私の語学力はまだまだとはいえず、相手の言っていることなら分かるようになってきた。ところがどっこい、エジプトではエジプト人が何を話しているのか理解できないのである。これは困った・・・とはいえず今更シリアに戻るわけにもいかず、行程の約3分の2を共にした五十嵐隊員を頼りに波乱万丈な旅が始まったのである。



ルクソールの遺跡

この旅のルートはアブ・シンベル、アスワン、ルクソール、カイロ、ポートサイドを9日間でまわるもの。現役バリバリで働いていた頃(と言ってもそんなに昔じゃないが・・・)は、何処かへ行くとなると事前に下調べをし、なんと自分達が回る場所の為だけにお手製(でも結構立派)ガイドブックなるものを作成していたのだが、最近はずっとさぼり気味。もう少し勉強してから行けばよかった・・・と思うものの後悔先に立たず、帰ってから復習を少々だけすることとなる。しかし、世界にも名高いピラミッドやアブ・シン

ベルの遺跡は、私の頭の中でイメージが膨らみすぎていたようで「こんなもの・・・」と少々がっかりしてまった。特にギザのピラミッドでは「あなたの居るべき場所はここじゃない！！」とピラミッドから離れた場所に、目の前にあるケンタッキーを見つめているスフィンクスに対して話しかけたい気持ちでいっぱいだった。その反対に、あまり予備知識のなかったルクソールのカルナック神殿などは、言葉が出ないほどの感動を覚えた。圧巻とはまさにこのこと。時間に追われるツアー旅行では味わう事のできない、気に入った場所で気が済むまで「ポーズ」をとることを堪能した。そして、エジプトから帰ってから「どうだった？」と聞かれると必ず「暑かった、とにかく暑かった」と答えている私。感想はそのあと、それほどエジプトの暑さ(熱風・・・)は私に強烈な印象を与えてくれていたようである。



五十嵐隊員とアスワンにて

さて、今回任国外旅行に出ようと決意したきっかけを一言で表すと「赴任半年の葛藤」である。JICAの旅行制度が変更になり、全額私費負担であること、任期残り1年半を残して任国外へ出てしまうことに多少の抵抗があったものの、決行したのには訳がある。

12月8日にダマスカスに降り立ってから早半年以上が経った。希望と不安が入り混じった心境で、徐々にシリアのこと、シリア人のことなど分か

りだしてきた。活動も手探りの状態が始まった。そんな時、突然私に襲いかかってきたもの、それは「何もしたくない症候群」。アラビア語を聞きたくない、アラビア語を話したくない、活動に行きたくない、何も考えたくない、ご飯も作りたくない、締め切りが迫る報告書を作成しても、全項目で半ページにもならない等・・・その背景には活動が大きく影響していると思う。赴任半年といっても、語学訓練や祝日と重なり、実際の活動期間は正味4ヶ月弱。その中で保育園を3園巡回する形をとってきた。1つの園での活動期間が短くて半月、長くて1ヶ月半という中で、自分に何が出来るか・・・と考えた時にずっしりと重たいものがのしかかってきた。子ども達こそ「アーイ、アーイ！」と慕ってくれるものの、先生達は必ずしも日本人のボランティアを歓迎しているわけではなく、どのように活動を進めていけばよいか分からなくなってしまったのである。人間関係を築くのに、私という人間を認めてもらうにも、また直接子どもに働きかけて変化をみてもらいたくても、時間が短すぎた。そこに現れた救世主、それがエジプトの同期隊員だったのである。彼女も保育士隊員で、訓練所時代から様々な悩みを分かち合ってきた仲である。国こそ違えど抱えている悩みには共感できる部分も多く、同じような境遇にある彼女と直接話がしたい！と考えたのだった。

五十嵐隊員と別れ、一人カイロに向かったその日は隊員総会。彼女だけでなく、思いがけず同期全員との再会を果たし、しばし思い出話に花が咲く。エジプト同期隊員は5人中4人が保育士隊員。彼女達も色々な悩み・問題を抱えながら頑張っている。中には私より深刻な隊員も・・・体育隊員も「先生達との人間関係が大変」と言いながら、(本人曰く)苦手な人付き合いを克服しようと頑張っている。みんな順風満帆に事が進んでいるわけではない。



エジプトの同期隊員と

同期と活動の話、他愛もない話、そんな話をしているだけで「同期ってやっぱりいいな」とつくづく感じた。また、同期以外のエジプト隊員との交流も新鮮なもので、エジプト事務所・調整員の水野さんのお話も私の心を軽くしてくれるものだった。翌日は一通り市内観光をした後、彼女の任地であるポートサイドに向かった。

ポートサイドでは彼女の活動先である保育園をはじめ、同期の活動している保育園、さらには先輩隊員の活動先の病院まで見学させてもらえた。

半年分の話題が山積みで、夜は彼女の家でじっくり語り、夏休み中で子どもが極端に少ないものの、彼女の活動先を見学し、先生達とも話ができて、おまけに彼女の同僚の家にお呼ばれまでしてしまった。

実際に彼女が生活している街を訪れ、人々に触れ、彼女と再会し、ゆっくり

話をしたことで人と関わる仕事は難しいけれど、やりがいがあるなあと考える余裕ができた。観光地は別として、エジプト人の人間性もいい意味、悪い意味どちらをとってもあまり変わりなく、エジプト隊員も大変だな、と思うと同時にこんなステキな所で活動できるなんて羨ましいな、とも思った。また、外からシリアを振り返ることによって、私はシリア人も含めシリアが落ち着くなあ、好きなんだなー、とも改めて感じていた。

この旅行の計画を企てたのは出発ぎりぎりまで、シリア・エジプト両調整員には多大な迷惑を掛けてしまった。

しかし何度も書類を送りなおして頂いたり、確認の電話を入れてくださったり、なによりこのギリギリの計画を容認してくださった事務所の方々、ありがとうございました。エジプトから帰った直後、【この頑丈(丈夫?)な私】が熱と下痢で3日ほど寝込んでしまったが、心身ともにリフレッシュ。残りの任期、お世話になった隊員はじめ全ての方の活躍を祈りつつ、気持ちを新たに寛大な心を持って頑張ろうと決意。でもその矢先、あ、やっぱりここは「シリア」なんだな()、という状況に直面しようとは思ひもなかったのである……私の悩みはまだまだ尽きないんだろうな。

イン・シャ・アッラー(未来の事は神のみぞ知る)

具体的には約束した時間に誰もいない。でもシリア人は「マーレッシュュ！」(問題なし!!)

問題おありだと思うのですが……他書ききれないほど多数。

活動報告

異文化交流会

中島磨貴子 (JOCV14-2)

視聴覚教育：UNRWA ダマスカス



記念写真

日本は、島国で、中国の東に位置する。主食は、米。首都は東京。

例えば授業でこう習ったとする。いったい生徒達はこの情報をどれくらいまでこれを理解し、覚えていられるだろうか。自分の過去の経験を振り返ってみる。与えられた英語の単語をひたすらテストのために覚えていたとき、どれほど勉強というものがつまらなく、辛いものだっただろうか。方程式を何度も解いていったい将来何に役立てるのだろうか、と思っているとき数学が面白くなかった。想像もできない他国の歴史や地理を勉強しても、

テストの後にすべて忘れてしまっていた。PCを勉強し、数学の知識が利用できる時知ったとき、数学が好きになったし、また、世界にでて英語で会話をできるようになって、教科書にない単語も学びたいと思った。世界を出てその国を見たとき、土地の歴史や地理をもっとりたいと思ったし、知り合った外国の友達に国を知りたいと思い、高校の時使った地図帳や歴史の本を開き始めたのは、つい最近のことだ。何かのきっかけによって、「勉強していたこと」が「学びたい」という意識に変わった。「習う」と「学ぶ」は違う。「教える」と「学ばせる」もまた違う。今、シリアで行われている教育は、一方向の「教える」「習う」の教育である。

2004年5月29日、UNRWA施設の一つダマスカストレーニングセンターで異文化交流会が行われた。この異文化交流会は、カナダ大使館が主催で行ったもので、ベルギー、アイルランド、ガーナ、オランダ、カナダ、イ

ンド、イラン、日本、そしてアメリカ合衆国のボランティアの人たちによってその国独特の文化を紹介するといったものだった。対象は、パレスチナの生徒49人(中学一年生)。今まで授業でしか習ったことのないさまざまな国の色に、会場に入ったとたん、目があちこちに向いていた。



日本セクション

「これなに？」二本の棒をみて、首をかしげる子がいる。「日本では、この二本の棒でご飯を食べるのよ。お箸という名前なの。」「この棒で？どうやってつかむの？」そして、教えてもらったように自分も真似してみる。一生懸命真似をしながら、いろんなものをつかもうとする。休憩時間に、ストローをお箸にみたくて、「日本ではこうやってご飯を食べるのでしょうか？」と見せてくれた子がいた。

知っているようで知らなかった近く

の国「イラン」の本を熱心にみる子供がいた。カナダの蜂蜜やガーナのジンジャーキャンディーなど各国の食べ物を味見しながら回る子もいた。毛嫌いしていたアメリカの人や文化に触れて、アメリカのこともっと知りたいと熱心に質問する子供たちの姿が見られた。両手を合わせて挨拶するのは、日本ではなくインドの習慣だと理解してくれた子供が大勢いた。「学びたい」と思わなければ、人は学べない。

この後、担当の先生のもとで子供達は学んだ国のことについてまとめお互いに報告しあう。今まで興味もてなかった国にも、目が引かれる。新聞の片隅に書いてあるイランの記事を自然に読んでしまうかもしれない。二本の棒をみて、これは日本の箸のようだ、と日本について誰かに話したくなるかもしれない。今回、伝えることができなかった英語をもっと勉強したいと思えるかもしれない。嫌いだったアメリカ人が好きになれるか

もしれない。

自分達から学びたくなる。自分達から知りたくなる。そういった子供たちの学習欲を高めて、それに応じて、情報を与える。与える側は、ファシリテーターとして、子供達の知識欲を高める、それに答える役割をする。時には、子供達が自ら本やテレビなどから情報を得ようとすることもできる。つまり、与える側は、知識欲を高めるだけの役割をすればいい。「三つ子の魂百まで」ということわざにもあるように、小さい時から学んだことを簡単には変えることはできない。しかし、学びたいと思ったことを人は簡単に吸収する。これは特に子供に言えることで、教育の場を考える際、子供達にどれだけの知識欲をかきたてられるかが教師の重要な役割になってくる。

赴任してもう一年半がたった。その間、常に意識していたのは、相手の学びたいという欲求を駆り立てるということ、技術移転というステップの

前にしなければならない、ということだった。「こうした方がいい」と一方的に導くのではなく、相手が主体的にその開発に取り組むプロセスを重視していくことが、持続可能な技術移転の方法ではないだろうか。「まこ、すごいね、それどやってするの？」相手がそういつてきてくれるのを待つ。私の役目は、「学びたいと思うチャンスを与える」こと。そして、「学びたいと思ったとき学ぶ環境を与えること」だと思っている。



浴衣を着たパレスチナ人中学生

活動報告

平成16年度教師海外研修

大山美砂子(千葉県国際協力推進員)
互井俊之(柏市立旭小学校)

JICAでは学校・地域で行われている国際理解教育・開発教育への支援・協力を積極的に進めています。国際理解教育・開発教育に関心のある教育機関の方を対象に、以下のような目的で開発途上国の社会・教育事情・国際協力活動の現場を視察していただく海外研修を毎年行っています。

- 1、 グローバルイシュー、途上国と日本の関係について理解促進を図ること
- 2、 研修経験を所属機関の国際理解・開発教育に反映させること
- 3、 地域内の既存の国際理解・開発教育ネットワーク強化に資すること
- 4、 地域における開発教育促進の中核となる人材育成を図ること

この度シリアを訪問したのは、JICA東京が管轄する東京・千葉・群馬・新潟から9名の先生方です。8月4日から11日までの8日間をかけて、協力隊の活動現場、草の根無償など0

DAの現場、シリア旧市街等を視察しました。日本で事前研修を2回行い、シリアの概要について学んでいたものの「百聞は一見にしかず」、実際に現地に来てみると、想像とはだいぶ違うようでした。視察先では常に積極的に質問があり、先生方の関心の高さを、うかがうことができました。シリアでの経験・研修の結果を、ぜひ日本の子ども達や周りの先生方に伝えて欲しいと思っています。また、協力隊・シニアボランティア・専門家の方とも連携し、より効果的に国際理解教育・開発教育が進められるようJICAとして、サポートしてゆきたいと考えています。(大山)

実質8日間の研修ではあったが、とても充実した研修ができた。今後、国際理解教育を進める上でたくさんの材料を集めることができたことが大きな成果と言えるだろう。

特にシリアの人達の親日的な気持ちは優しさとなっているいろんな場面で

私達を感動させてくれた。探している場所を丁寧に教えてくれたり、タクシーを拾ってくれたりした。悪の枢軸国とアメリカから非難を受けているシリアではあるが、一般の生活の中ではとてもそうは思えない。ダマスカスの街は治安が保たれ活気に満ちている。女性も生き生きと暮らしていた。習慣や宗教の違いはあっても、同じ人間として共通する部分の方がむしろ多いと感じた。

しかし、私達がいい思いをしたその裏で JICA の努力があることを知った。若い人達だけでなく、シニアのパワーに驚かされた。こうした日々の地道な貢献が、将来への大きな力を生むだろう。私たちはこの研修を通して21世紀を担う子供達にそのことを教えていかなければならないと改めて思った。(互井)



水資源情報管理センター前で

リサイクル草の根無償

下村 佳州紀 (在シリア日本国大使館)

いつも「アハパール・カシオン」を楽しく拝読しております。

さて、様々な記事が掲載される本紙ですが、その中でも活動報告・近況報告は「顔の見える援助」の一環でもあり大変関心を持っております。特に、我が国に帰国されたJOCVやSVの方々に、シリアとの関係をこれからも続けたい、できれば何らかの協力が出来ないものだろうかとの高い問題意識を持ち続けておられる方が多いことに感銘を受けました。また、本紙自体も帰国された方々とシリアとの橋渡しをするというのが目的の一つであるようです。

そこでご紹介したいのが、リサイクル草の根無償という制度です。本制度は、外務省の草の根・人間の安全保障無償資金協力の一つとして、我が国NGO、地方公共団体等が途上国のNGO、地方公共団体等に対し、中古物資等を贈与するに当たり、本来であれば物資の受け取り側である途上国のNGO等が負担すべき輸送費及び必要最小限整備費を我が国政府が供与するものです。

もう少し具体的に説明させていただきます。例えば、シリアの廃棄物処理問題を改善するためには、国民の間の意識向上もさることながら、廃棄物処理のインフラとなるゴミ収集車をより多く必要としています。しかしながら、シリアの地方公共団体にはゴミ収集車を新規購入するための予算が絶対的に不足しているのが現状です。他方、我が国の地方公共団体は減価償却期間を経たゴミ収集車を、例えばまだ十分に使えるものであったとしても、処分する必要があります(例外については後述致します)。このような二国間のギャップを埋める方法として、

我が国の地方公共団体にゴミ収集車を無償で(つまり無料で)提供してもらい、そのゴミ収集車をシリアの

地方公共団体が受け取るという方法があります。しかし、無料で提供してもらったゴミ収集車も、無料で輸送することは出来ません。その輸送費を負担するのが、リサイクル草の根無償制度、というわけです。

さて、ここまで読んで頂いた方の中には、「理屈としては通っているが実際にはなかなか難しい、特に複雑な手続きがつきまとう車両の輸送には豊富な経験が必要とされ、我が国の地方公共団体にその手続きを求めるのは非現実的である」との印象を持たれた方もいらっしゃるかもしれません。

そこで、供与車両の修理点検や、細心の注意を要する輸送過程では、海外活動経験の豊富な(社)日本外交協会(<http://www.spjd.or.jp>)の協力を得ることが現実的な解決策と考えられます。つまり、手間のかかる民間工場での整備、必要とされるスペアパーツの購入、輸送手続き等を専門的知識と経験を有した団体に担当してもらうということです。

しかし、このリサイクル草の根無償制度は、まだまだ広く知られていない状態にあります。そこで、帰国されたJOCVやSVの方で、シリアへの協力を考えてみても良いと仰って頂けるのであれば、是非ご協力を検討頂ければと思います。

具体的には、お住まいの地方公共団体に対して、シリアの地方公共団体に対するゴミ収集車の寄贈を働きかけて頂けると大変助かります。

その際には、

ゴミ収集車を保有しているのかどうか(民間に完全委託し、自治体の財産にはゴミ収集車はない、ということも往々にしてあるようです)

保有している場合、海外支援のために更新時に無償提供いただけるかどうか(新車購入の際に下取り契

約済み、あるいは財産の適正処分のために入札を行っている場合があります)

提供可能だとして、いつ頃更新車両があり、またその供与依頼(シリアの地方公共団体が、ゴミ収集車を寄贈してくださいと書面にて依頼することになります)はいつ頃までに提出すべきか

の3点を、まずはご確認頂ければ幸いです。

なお、このような試みは当大使館としては初のもとなります。また、関係者も 我が国の地方公共団体、ご協力頂けるJOCV・SVのOB/OGの方、シリアの地方公共団体、(社)日本外交協会、当大使館、シリアJICA事務所、日本国外務省と多岐にわたります。従いまして、関係者間の連絡・調整が難しいのですが、特にシリアの地方公共団体との連携が重要になります。

従いまして、まずはダマスカス郊外県との協力から始めたいと考えております。ダマスカス県には、既に我が国のゴミ収集車が二国間援助により供与されていますが、郊外県への供与はこれを補完し、我が国の顔の見える援助としては理想的なものとなるだろうと考えております。

勿論、シリア初の試みとなりますので色々難しいこともあるかもしれませんが、もし、ご協力を検討頂ける方がいらっしゃいましたら、まずは在シリア日本国大使館草の根無償担当下村(kazuki.shimomura@mofa.go.jp)及びJICAシリア事務所の木川浩史様(kikawa.hiroshi@jica.go.jp)までご一報下さい。

以上、どうか宜しくご検討下さいませようお願い申し上げます。

なお、リサイクル草の根無償の概要につきましては、外務省のホームページ(www.mofa.go.jp/mofaj)の中にあるODAページ(リサイクル草の根無償にてサーチをかけてください)、日本外交協会のホームページ(国際援助協力事業の項目を参照)にも記載があります。

We are on the WEB. See us on www.jica.go.jp. www.jicasr.org

お知らせ

本ニュースレター配信ご希望の方は当事務所まで氏名、メールアドレス、JICAとの関係(所属)を連絡願います。

編集後記

シリア事務所に来て、はや2週間。慣れないことばかりで戸惑うこともしばしばですが、楽しく充実した日々を送っています。以前、少しだけダマスカスには来たことはありますが知らないところばかり。インターンの機会にぜひ地方にも行ってみたいです。9月末日までの2ヶ月間宜しくお願い申し上げます。(平成16年度JICAインターン山本剛)